

第27回日本臨床環境医学会学術集会の開催に当たって

会期：平成30年7月7日－8日

開催地：三重大学（三重県津市），環境・情報科学館
学術集会テーマ：「トータルヘルス社会の実現に向けて」

三重大学大学院医学系研究科看護学専攻 基盤看護学領域実践基礎看護学分野
教授 今井奈妙

日本臨床環境医学会学術集会におきまして、女性および看護職が大会長を拝命するのは初めてのことであり大変光栄に存じます。また、この学術集会の三重県での開催も初めてとなり、貴重な機会を与えてくださいました会員の皆様、そして、ご関係者の皆様に心よりお礼を申し上げます。

三重県は、伊勢志摩サミットが開催された天然資源の豊かな地域です。県のほぼ中央に位置する三重大学は、5つの学部が同じ敷地にある総合大学であり、世界一の環境大学を目指すことをスローガンとしています。第27回目の日本臨床環境医学会学術集会を、大学中央部にある環境・情報科学館で開催できることは、三重大学に所属する教員としても大変光栄に存じます。

今回、学術集会のテーマを「トータルヘルス社会の実現に向けて」としました。トータルヘルス社会とは、人にとってあるべき健康を目指した、疾病の治療や予防に留まらない包括的なヘルスケアシステムの構築された社会を表しています。現在の日本は、少子高齢化という地球規模の課題における先進国となり、これまで優秀さを際立たせてきた国民皆保険システムも限界に達しています。疾病の治療は、医療者にとっての重要な任務ですが、地域包括医療や地域共生事業の推進は、疾病を「治すこと」から「予防すること」へシフトチェンジさせ、医療者の考え方にも変化をもたらしています。しかし、疾病の「予防」という概念は、悪い事態が起こるという想定下で、それを防がなければならないという考え方に基づいており、病気自体の捉え方には大きな変化がみられま

せん。

これに対して、古くから看護の現場においては、病気を善悪という一側面的な価値観で捉えるのではなく、人生における病気という現象の意味を問う場面があると認識されてきました。自身の経験においても、過去、消化器外科で臨床看護師として働いていた頃には、多くの患者さんが、疾病を通して人生の方向転換をしたり、考え方を改めたりする姿を見てきました。また、現在、化学物質過敏症の発症とその症状に苦しむ患者さん達の訴えに耳を澄ます中では、この社会に、いわゆる環境病という新しい疾病概念が出現した意味について考えさせられています。

つまり、疾病には「悪いもの」という表象がある一方で、その苦しみを契機として、それまで生きてきた環境や生活習慣を見直し、その後も健康状態を維持発展するための機会となる「良いもの」としての捉え方があります。とくに、化学物質過敏症や電磁波過敏症のように、未だにその発症メカニズムや治療法が解明されていない病いの研究においては、目前にある人体から得られる知見に加え、それをとりまく過去からの環境要因と生活習慣を包括的に理解する努力を求められているように感じます。当事者が、それまでの生き方を省察し、より健康的な生に向かうためのチャンスが疾病の哲学的存在意義とするならば、環境と生活習慣を心身の健康にとってより望ましい方向に導くことで、それは無用の長物になると考えます。

これからの医療者にとっては、疾病の治療と予防を超えて、疾病現象を必要としない心身を作り

上げる方法を探求することも課題になってくると
思います。その意味において、日本臨床環境医学
会は、あらゆる意味における環境と人の健康を考
える学際的組織としての長い歴史を持ち、様々な
分野の研究者による熱心な取り組みが行われてき
た、まさに、先駆的にトータルヘルス社会の実現
を追求してきた学会であるとも言えるのではない
でしょうか。

今回の学術集会では、ホリスティック（包括
的・全体的）に対象をとらえて、疾病に対する総
合的なアプローチをとるだけでなく、そもそも病
気という現象の意味にも触れられるような場に出
来れば良いと考えます。そのために、演題発表や
講演の時間だけでなく、休憩や食事時間の全て
に、トータルヘルス社会の実現について考えられ
る仕掛けを工夫したいと思っています。

7月7日は七夕です。身体内で各種臓器の連携に
よって健康状態が保持されていくように、本学術
集会における新たな出会いが多彩な社会的ネット
ワークを形成し、社会のさらなる発展に繋がるこ
とを祈念しています。そして、日本臨床環境医学
会のこれまでの実績と信頼に裏打ちされた多様な
研究成果をヘルスケアの消費者の皆様と共有し、
様々な立場から目指すべき「トータルヘルス社
会」について討論し、その実現に向けた方法の探
究を楽しめる学術集会にしたいと準備を進めてお
ります。

つきましては、学会理事や会員の先生方および
各種関係団体にご所属の皆様、多くの演題のご
投稿をお願いしたく、本学術集会を活気溢れるも
のへと導いていただきますよう重ねてお願いを申
上げます。